

コーパスに見る類義表現： 「気がつく」と「気づく」

杉本 武

1. はじめに

「気がつく」と「気づく」は、一般的には前者は慣用句、後者は一語の動詞とされるものであるが、形態的には、前者の「が」が脱落し、一語化したもののように見える⁽¹⁾。また、『日本国語大辞典』によると、「気がつく」の初出例は、「考えつく。心づく。気づく。かんづく。」という用法で「玉塵抄〔1563〕」, 「息を吹きかえす。正気にかえる。」という用法で「日葡辞書〔1603～04〕」, 「気づく」の初出例は、「生き返る。正気に返る。気がつく。」という用法で「交隣須知〔18C 中か〕」, 「感じて知る。さとる。気がつく。」という用法で「俳諧・文政句帖 - 五年〔1822〕七月」とされており、歴史的にも「気がつく」が先行する。

また、用法においても、かなり重なるように見える。

- (1) a. 太郎がいないことに気づいた。
b. 太郎がいないことに気がついた。

一方で、単に「が」が脱落したとは、もはやみなせないような現象もある。まず、明らかな違いとして、次のような属性的な用法が挙げられる。

- (2) a. 彼はよく気がつく。
b. *彼はよく気づく。

また、次の文の場合、不適格とまでは言えないものの、一方が他方より若干不自然に感じられる。

- (3) a. 気がつくと、部屋にはもう誰もいなかった。

- b. ?気づくと、部屋にはもう誰もいなかった。
- (4) a. ?そのことに気がつくともしない。
- b. そのことに気づくともしない。

ただし、微妙な違いであり、このような微妙な違いをどのように客観的に示していくかが問題になるが、本稿ではコーパスにおけるその出現の違いでもって示す。さらに、このようなコーパスに見られる現象が、それぞれの表現の文法的、意味的性質の違いを反映したものであることを明らかにする。

なお、以下では、コーパス⁽²⁾を用いて、まずは量的な傾向を見るが、本稿は定量的な分析を行うものではない。いくつかの量的な現象を組み合わせることによって現象を質的に解釈することを試みる。また、あくまでも出発点は(2)～(4)に示したような内省に基づく違いである。

また、以下の分析においては、大量のコーパスを扱うという関係上、個々の用例がどのような用法であるのか、人手による確認は行っていない。そうではなく、文法的環境などから、その用法を推定するという手法をとる。無論、これは、近似的なやり方であり、次の段階として、用例を詳細に検討するという手順も必要であるが、本稿では、コーパスの一つの利用法として、上記のような手法を提示する。

2. 先行研究、辞書の記述

「気づく」について取り上げた研究としては、宮島(1972)、藤田(1988)⁽³⁾があるが、管見の限り、「気がつく」と「気づく」の違いについて分析したものはないようである。個別に言及しているものについては、後に適宜取り上げることにし、ここでは、参考のために、類義語辞典、国語辞典における記述を見ておきたい。

●『類語大辞典』

気付く

何かの拍子にそのことを知る。「自分の誤りに～」「体調不良に～」「気づいたとき、病院のベッドの上に私はいた」

気が付く

「気づく」の、より口語的な言い方。「道を間違えたことに～」「気がついたときはもう朝になっていた」

●『学研国語大辞典』

きがつく【気が付く】《句》

- ①注意が行き届く。「人の世話には、こまかく一・いた〈大仏・風船〉
「よい所に一・いた」
- ②対象を意識する。「ふっと一・くと、先刻から側で何処かのハツばかりの男の児が、…不思議そうに私の面を瞻上げている〈二葉亭・平凡〉」
- ③意識をとりもどす。「一・くと、私は病院のベッドに寝かされていた」

きづく【気付く】《自五》

- ①〔意識していなかった事柄を〕自分で意識する。感づく。「良人のおなかに動悸が波打つようなのに、初めて一・いて、おやっと目を見張りました〔芹沢・愛と死の書〕」「私はこの火事の原因に一・いてぎょっとした〔太宰・斜陽〕」
- ②思い出す。「約束したことに一・いた」

●『明鏡国語辞典』

き【気】

気が付く

- ①そのことに考えが及ぶ。気づく。
- ②細かいところまで注意がゆきとどく。「よく一人」
- ③意識を取り戻す。「一と病院のベッドの上だった」

きづく【気づく（気付く）】

- ①その方面に意識が向いて、突然物事存在や状態を知る。気がつく。「尾行者〔事の重大さ〕に一」「守衛に一・かれないように侵入する」〔語法〕「～に気づく」が標準的だが、「～を気づく」の形（他動詞）でも使う。「私の振り返ったのを――・かないらしく千代子が言った〈川端康成〉」
- ②意識を取り戻す。正気に戻る。気がつく。「一・いたときは病院のベッドにいた」

以上の辞書の記述を見比べてみると、いくつかの問題が見出せる。

一つは、1.でもふれたように、「気づく」には、「気がつく」の用法の一つ（『学研国語大辞典』の①「注意が行き届く。」、『明鏡国語辞典』の②「細かいところまで注意がゆきとどく。」）がないことである。このような属性的な用法は、「気づく」にはない。

また、『類語大辞典』では、「気がつく」は、「気づく」のより口語的な言い方とされているだけであるが、前述のように、「気づく」には属性的な用法がなく、単に口語的かどうかの違いではないと考えられる⁽⁴⁾。

さらに、『明鏡国語辞典』の「気づく」の②「意識を取り戻す。正気に戻る。気がつく」という用法が、『学研国語大辞典』では記述されていないことである。これは、次のような用法であるが、これは、『明鏡国語辞典』における「気がつく」の③「意識を取り戻す」と同じ用法と考えてよいだろう。

(5) 気づいたときは病院のベッドにいた。

つまり、『学研国語大辞典』の場合、このような用法の記述が「気がつく」(③「意識をとりもどす。」)にはあるが、「気づく」にはないことになる。

以上から、「気がつく」「気づく」には、以下のような用法があると考えられる。

1. 対象の存在や状態を知る (以下、「対象認知用法」と呼ぶ)。
2. 意識を取り戻す (以下、「意識回復用法」と呼ぶ)⁽⁵⁾。
3. 注意が行き届く (以下、「属性用法」と呼ぶ。「気がつく」のみ)。

3. 用例の偏り

「気がつく」と「気づく」では、以下のように、コーパスにおける用例数⁽⁶⁾がかなり異なる。

気がつく	3574 例
気づく	8337 例

このため、以下では、それぞれの用法の用例数を示す際、特に断らない限り、それぞれの表現の出現数 (つまり、「気がつく」は 3574, 「気づく」は 8337) を分母とする比率を括弧内に示すことにする。

以下では、まず、いくつかの文法的環境について、「気がつく」と「気づく」がどの程度現れるか見ていく。ここで大まかな傾向を見た上で、次節でこのような偏りの意味について考察する。

3.1. 条件形の出現率

次に、「気がつく」「気づく」が「～と」「～ば」「～たら」の形になったものの用例数を示す⁽⁷⁾。

	～と	～ば	～たら
気がつく	431 (12.1%)	99 (2.8%)	163 (4.6%)
気づく	140 (1.7%)	40 (0.4%)	65 (0.8%)

このように、「気づく」は、「気がつく」と比べ、「～と」「～ば」「～たら」の形の条件表現としてはほとんど現れない。

3.2. 使役形, 受動形の出現率

次に、「気がつく」「気づく」に助動詞「させる」「られる」が後接したものの用例数を示す。

	～させる	～られる
気がつく	0 (0.0%)	16 (0.4%)
気づく	139 (1.7%)	465 (5.6%)

「られる」が後接したものの中には、受動ではなく尊敬のものも含まれる。しかしながら、使役にしても受動にしても、「気がつく」よりも「気づく」の方がより多く現れることは事実であろう。特に、「気づかせる」の用例数に比べ、「気がつかせる」の用例が見られないことは、注目すべきであろう。

3.3. 願望形, 命令形, 禁止形, 意志形の出現率

次に、「気がつく」「気づく」に願望の助動詞「たい」が後接したものの、命令形、禁止形、意志形のものを用例数を示す⁽⁸⁾。

	～たい (願望形)	～け (命令形)	～な (禁止形)	～こう (意志形)
気がつく	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.0%)	2 (0.1%)
気づく	5 (0.1%)	10 (0.1%)	1 (0.0%)	11 (0.1%)

このように、「気がつく」とは異なり、「気づく」は、わずかながら意志的な文法的環境に現れることがわかる。なお、「気がつこう」の2例は、以下のものであり、典型的な意志形ではないか推量形である。

- (6) 気がつこうとすると、今まで見えなかったものがよく見えてきます
(クロワッサン)
- (7) 気がつこうがつくまいが、彼女はただ自分のペースで変化し、成長して行くのかもしれないけど。
(中山ゆかり / スクールカウンセラー日誌)

一方、「気づこう」の場合、次のような意志形のもの4例含まれる。

- (8) その実のひとつを採取したに過ぎないことに気づこう。
(橘月尚龍 / 魔法の繁盛錬金術)

なお、宮島 (1972) では、「『あわてろ』とか『気づけ』とかいう命令形はない (p.422)」とされている。また、「そして、これらの心理現象、心理的生理現象に特徴的なことは、命令形や意志形が使われない点でほかの無意志動詞と同列にあるにもかかわらず、禁止の用法があることだ (p.425)」とした上で、「たとえば『気づくな』とか『このむな』などは、ちょっと言いにくいようだ (p.425)」としている。もちろん、上の表では、「気づく」の命令形の10例に対して、禁止形は1例しかなく、量的には命令形の方が多い。ただし、これは、BCCWJの全動詞の命令形が67688例であるのに対して、禁止形⁽⁹⁾は5185例であり、この差を反映したものであろう。

また、願望の「～たい」に関しては、藤田 (1988) では次のように述べられている。

[略] 「～ガ / ヲ知りたい」ということは言えても、「～ニ気づきたい」とは、ふつうには言いにくい。ということとは、「気づく」は自力の営みであっても、自力で「そうしたい」と思ってどうなるものでもないのだということがわかる。
(藤田 (1988:28))

「気づく」は、願望形になりにくいということはそうであるが、「気がつく」と

比べると相対的にはなりやすいと言える。

3.4. ヲ格, 二格, ト格の出現率

ヲ格, 二格, ト格の用例数に関しては, 「気がつく」「気づく」の直前に「を」「に」「と」が現れているものの用例数を以下に示す。なお, 長単位でも1語以上離れると, 「気がつく」「気づく」と係り受けの関係にないものが含まれるため, 直前とした。

	ヲ格	二格	ト格	計
気がつく	0 (0.0%)	1293 (36.2%)	141 (3.9%)	1434 (40.1%)
気づく	53 (0.6%)	4461 (53.5%)	524 (6.3%)	5038 (60.4%)

『明鏡国語辞典』に「[～を気づく]の形(他動詞)でも使う」と記載されているように, 「気がつく」の場合, ヲ格をとった用例が見られないが, 「気づく」の場合, 数は少ないものの, 見られる。また, これらの格成分をとる比率で言うと, 「気づく」の方が多いことがわかる。

3.5. 副詞の出現率

副詞との共起について見てみよう。次は, 「気がつく」「気づく」の直前に副詞が現れている場合である。

	副詞
気がつく	425 (11.9%)
気づく	599 (7.2%)

「気がつく」の方が, 直前に副詞が現れることが若干多いことがわかる。これは, 直前に限っているため, 前項で見た格成分の出現とも関係する。

また, どのような副詞と共起しているかを見てみると, 上位5語(「気がつく」は同率のため6語)は以下ようになる⁽¹⁰⁾。

- 気がつく：ふと (19.8%), 初めて (9.9%), はっと (9.6%), 直ぐ (5.6%),
良く (5.4%), 全く (5.4%)
- 気づく：ふと (11.7%), 全く (11.7%), 初めて (9.7%), はっと (5.8%),

漸く (5.8%)

両者ともによく現れる副詞は、「全く」「初めて」「直ぐ」「ふと」「はっと」のようなものである。このうち、「全く」「直ぐ」「初めて」は、BCCWJに現れる副詞の中でも高度数のものであるため⁽¹¹⁾、「気がつく」「気づく」両者に特徴的な副詞は、「ふと」「はっと」と考えられる。これは、本稿では詳しくは述べないが、対象認知、意識回復という、「気がつく」「気づく」の意味に起因するものである⁽¹²⁾。ただし、偶然や思いがけない様、つまり意図的ではない様を表す副詞「ふと」「はっと」が、相対的には「気づく」に現れにくいことは注目される。

また、「気がつく」に「良く」が多いのは、「気がつく」にしか属性用法がないことによると考えられる。

3.6. テイル形, テイク形, テクル形の出現率

「気がつく」と「気づく」のアスペクト的性質を見るために、次に、テイル形, テイク形, テクル形の用例数を示す。

	～ている	～ていく	～てくる
気がつく	173 (4.8%)	3 (0.1%)	1 (0.0%)
気づく	833 (10.0%)	30 (0.4%)	14 (0.2%)

いずれも、直観的にもそうであるように、テイル形になるという点では違いがないが、「気づく」の方がよりテイル形になりやすいことがわかる。また、数は少ないものの、「気づく」は、テイク形, テクル形になり、事態の進展を表せるのに対して、「気がつく」は、ごく稀であることがわかる。

4. 考察

4.1. 対象の存在

まず、3.1. で見たような条件形で現れている用例を見ると、次のような二つの用法があることがわかる（ここでは、「～と」の用例を挙げる）。

- (9) a. ふと気がつくと、私たち三人の問題なのに、いつのまにか弟の

ヨメがいっしょに座っていることもあった。

(小林千登勢 / されど道づれ嫁姑)

- b. 彼女は私の視線に気がつくと、そのフォークをすっと手にとり、にこッと私にむかって笑いかけながら、「いただきまアす」と食べはじめた。 (塩田ミチル・塩田丸男 / われらカレー党宣)

- (10) a. ふと気づくと奥の部屋から水絵ちゃんが出てきて、母親を見た途端、火がついたように泣きだした。 (盛田隆二 / おいしい水)

- b. 警視庁捜査一課の蒲生誠は、美由紀の姿に気づくと腰を浮かせてサングラスをはずした。 (松岡圭祐 / 千里眼洗脳試験)

a. は「気がつく」「気づく」対象が二格で現れている用例で、b. はそれが現れていない用例である。そこで、条件形の用例について、「気がつく」「気づく」の直前に「に」が現れているものを調べると、以下のようになる（比率は、3.1. で示した条件形の用例数を分母としたものである）。

	～と	～ば	～たら
～に気がつく	32 (7.4%)	5 (5.1%)	5 (3.1%)
～に気づく	72 (51.4%)	12 (30.0%)	30 (46.2%)

これを見ると、「気がつく」の場合、二格の対象が現れる用例が極めて少ないが、「気づく」の場合、二格の対象が現れる用例が半数あるいは半数近く占めることがわかる。ところが、3.4. で見たように、「気がつく」と「気づく」が二格をとる用例は、「気づく」の方が多いものの、このように極端な違いはない。一方、条件節の場合、「気がつく」が二格をとる用例は極めて少ないことになる。

二格をとらない、先の(9a)(10a)のような例を見ると、これらの用法は、意識回復用法であることがわかる。また、「気がつく」の方が「気づく」より、二格をとらない用例が多いことから考えると、「気がつく」の場合、二格の対象をとらない意識回復用法の用例が比較的多いと考えられる。

4.2. 意志性

3.3. で示したように、数は少ないものの、願望形、命令形、意志形の場合、

「気づく」が用いられる。これらは、動詞が意志的である場合にとる形であり、形の上からは、「気がつく」より「気づく」の方が意志性が高いことになる。

ただし、実際の用例を見てみると、意志形の場合、次のような「気づこうと(も)しない」あるいは「気づこうと思わない」のような例が11例中6例と多く、典型的な意志の用例ではない。

(11) 己らの矛盾になど、彼らは気づこうともしない。

(藤原真莉 / 姫神さまに願いを)

また、願望形の用例についても、5例中3例が、次のような「気づきたくない」という用例であり、典型的な意志とは考えられないだろう。

(12) 本当は途中で、気づきたくないものに気づきはじめていた。

(北林優 / ミッドナイトブルー)

この点からは、無論、典型的な意志動詞からは遠いものであると考えられる。

意志性の違いは、受動形、使役形の偏りにも現れていると考えられる。受動、使役は、必ずしも意志動詞に限られないが、比較的、意志動詞が受動、使役になりやすい。また、3.4. で示したように、「気づく」の方がヲ格の対象をとりやすい。ヲ格をとる他動詞は、意志性を失う現象もあるが、基本的には意志的であり、この点からも「気づく」の方が意志性が高いと言える。さらに、3.5. で述べたように、「ふと」「はっと」のような副詞が、「気づく」の方が現れにくいということも、その傍証となるであろう⁽¹³⁾。

なお、意志性に関わる文法現象として、可能形になるかどうかということもあるが、「気がつける」が8例であるのに対して、「気づける」は45例であった⁽¹⁴⁾。ただし、意志的でない動詞が必ずしも可能形をとれないわけではないので、ここでは参考までに示すことにする。

4.3. 過程性

3.6. で見たように「気がつく」も「気づく」もテイル形をとることができる点では、大差はない。また、次の例のように、いずれもテイル形が結果相、経験相を表す。

- (13) a. でも、最近はまわりの人も気がついているみたいだが、わけを言っても、どうしてそんなことで笑えるの？という顔をされることのほうが多い。
(浅田道子 / 家族)
- b. さつ子はもちろん、養安もはやばやとハルの様子に気がついている。
(西木正明 / 養安先生、呼ばれ！)
- (14) a. 演出家は彼の心の動揺には全く気付いている様子はなかった。
(中村真一郎 / 中村真一郎小説集成)
- b. 誰かが先に気づいているのに、あとから「僕もそう思っていたよ」と言われても、シラけます。
(中谷彰宏 / なぜあの人は仕事が速いのか)

この点で、「気がつく」も「気づく」も、アスペクト的性質としては、非過程的であることに違いはなさそうだが、「気がつく」と比べ、「気づく」は、進展的なテイク形、テイル形をとりやすいことから、過程も表し得ることがわかる。次は、「気づいていく」「気づいてくる」の用例であるが、このうち a. のように反復的なものもあるが、b. のような進展的なものも含まれる。

- (15) a. 赤ちゃんの望んでいるものに、次つぎと気づいていく母親たち。
(唐沢明希・山西みな子 / ザ・自宅出産・水中出産)
- b. しかも、生徒の主體的な音楽的活動を通して、自分たちで雅楽の本質に迫り、その普遍性に気づいていく指導過程は、これまでの知識一辺倒の学校音楽鑑賞教育からの脱却を図る 1 つの契機と考える。
(杉原孝・福士幸雄 / 日本音楽を学校で教えるということ)
- (16) a. それが二年、三年と経つうちに、B株の脆弱さに海外投資家が気づいてきたわけです、B株は米ドル、H株は香港ドルで、海外投資家が買える株です。
(関根進 / シニア成金に挑戦!! 「攻める！中国株」)
- b. そのことを、最近、アメリカ自身も気づいてきたのか、千九百八十五年の暮に財政収支均衡法を成立させた。
(下村治 / 日本は悪くない)

これらの用例を見ると、「気づいていく」の場合、意図的な解釈が可能である

ことがわかる。

5. おわりに

以上、見てきたように、「気がつく」と「気づく」は、属性用法を除くと、同様な意味、用法、文法的な性格を持つように見えるが、次のような点で異なりが認められることがわかった。

1. 「気がつく」より「気づく」の方が意識回復用法に用いられにくい。
2. 「気がつく」より「気づく」の方が意志性が高い。
3. 「気がつく」より「気づく」の方がヲ格をとりやすい。
4. 「気がつく」と異なり、「気づく」は過程的にも用いられる。

さらに、これらは、独立した違いではなく、これまで述べてきたように、このうち1.と3.は、2.の「気づく」の意志性に関わるものでないかと考えられる。まず、「気づく」は意志性が「気がつく」と比べ相対的に高いため、意識回復用法のような、非意図的な用法には現れにくく、ヲ格をとりやすいと考えられる。また、4.の過程性を持ちやすいという点も、意志性に関わるのではないかと思われる。

また、このような違いがあるということは、1.でも述べたように、もはや単純に、「気づく」は「気がつく」の「が」が脱落しただけのものとは考えられないことを示す。それでは、「気がつく」と比べ、なぜ「気づく」は上記のような特徴を持つのであろうか。単なる偶然なのであろうか。これは、あくまでも推測であるが、「気がつく」の場合、「つく」が単独の動詞として残るため、無意志動詞あるいは自動詞としての性格が色濃く残るのに対して、「気づく」のように「が」が脱落し、複合した形式の場合、本来の無意志動詞あるいは自動詞としての性格が弱まるのではないだろうか。「気がつく」が慣用句であるのに対して、「気づく」は複合語と考えることができる。慣用句も複合語も不透明性を持つが、不透明性に何らかの違いがあるのかもしれない。

ただし、これは、あくまでも推測であり、検証が必要である。その際、同様の現象によって一般化できるかどうかの問題であるが、このような「Nガ+V」型の慣用句が「N+V」型の複合動詞になることは稀のようである。例えば、「腰が砕ける」に対する「腰砕け」のように、複合名詞になるものは多い

が、「腰砕ける」のような複合動詞にはならない。「つく」に関しては、「片がつく」と「片づく」、「傷がつく」と「傷つく」のようなものもあるが、極めて少ないようである。そのみならず、「片づく」には、「片方に寄る」のような古く万葉集にも見られる用法があり、これ以外の用法においても、歴史的には逆に「片づく」が「片がつく」にわずかに先行する。また、「傷つく」の場合も、「人の気持、名声、信用などがそこなわれる（『日本国語大辞典』）」のような用法においては、むしろ「傷がつく」にかなり先行する。これらは、意味、用法もかなり異なり、「が」の脱落によるものとは考えにくく、全く別個に派生したものと考えるべきであろう。これは、「気がつく」と「気づく」にも同様に言えることかもしれない。

このような点で、「気がつく」と「気づく」の現象は、特殊な現象であるのかもしれない。表現の微細な違いという点では意味を持つものと考えてるが、これが単なる語的な問題であるのか、何らかの一般性を持つ問題であるのか、さらに検討が必要である。また、それぞれ、慣用句、複合動詞であるため、慣用句論、語構成・語形成論の中で検討していくことも必要であるが、本稿では、その点には立ち入れなかった。今後の課題としたい。

注

- (1) ただし、このように解釈してよいかどうかは、5. で述べるように問題が残る。
- (2) コーパスは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下、BCCWJ）を用いた。ただし、サブコーパスのうち特定目的サブコーパスを除いたもの、つまり、出版・新聞サブコーパス、出版・雑誌サブコーパス、出版・書籍サブコーパス、図書館・書籍サブコーパスを対象として検索した結果である。これは、特定目的サブコーパスの場合、抽出の原則が異なるためである。用例数が0のものの中には、BCCWJ全体では用例が見られるものもある。したがって、そのような現象が全くないということを主張するものではない。
- (3) 藤田（1988）は、「知る」などとの対比の中で、引用の問題とも絡めながら、「気づく」の特質について論じたものである。
- (4) 「気がつく」と「気づく」に文体的な違いがあるかどうかは、紙幅の関係上、本稿では扱わないが、比較的固い文体と考えられる、BCCWJの特定目的サブコーパス・広報誌において、「気づく」が125例見られるのに対して、「気がつく」が13例しか見られないことから、テキストのジャンルによって、その出現が異なることは事実ではある。ただし、後述する意識回復用法の用例は、広報誌のようなものには現れにくいと考えられるため、単なる文体の問題として捉えるのではなく、後述するような「気がつく」と「気づく」の用法の偏りによるものと考えられる可能性はある。
- (5) ただし、意識回復用法は、辞書にあるような「意識を取り戻す」と言うよりも、

「回りを意識するようになる」とでも記述すべきだろう。

- (6) 以下で挙げる用例、用例数等は、特にことわらない限り、「中納言」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)の短単位検索を使用して検索した結果である。

また、検索は、検索する表現がどのように解析されるか、形態素解析エンジン MeCab (0.993) および形態素解析辞書 UniDic (1.3.12) を用いて確認した上で行った。

なお、BCCWJ 全体では、「気がつく」の用例数は 5131 例、「気付く」の用例数は 11448 例である。

検索の際、いずれも以下の検索条件式のように、「つく」「気づく」の部分は、「語彙素読み」と「品詞」を検索項目とした。

```
「気がつく」: (語彙素読み = "ツク" AND 品詞 LIKE "動詞%") AND 前方共起: (語彙素 = "が" AND 品詞 LIKE "助詞・格助詞%") ON 1 WORDS FROM キー AND 前方共起: (語彙素 = "気" AND 品詞 LIKE "名詞%") ON 2 WORDS FROM キー IN (subcorpusName = "出版・新聞" AND core = "true") OR (subcorpusName = "出版・新聞" AND core = "false") OR (subcorpusName = "出版・雑誌" AND core = "true") OR (subcorpusName = "出版・雑誌" AND core = "false") OR (subcorpusName = "出版・書籍" AND core = "true") OR (subcorpusName = "出版・書籍" AND core = "false") OR (subcorpusName = "図書館・書籍" AND core = "false") WITH OPTIONS unit = "1" AND tglWords = "20" AND tglKugiri = "|" AND tglFixVariable = "2"
「気づく」: (語彙素読み = "キツク" AND 品詞 LIKE "動詞%") IN (subcorpusName = "出版・新聞" AND core = "true") OR (subcorpusName = "出版・新聞" AND core = "false") OR (subcorpusName = "出版・雑誌" AND core = "true") OR (subcorpusName = "出版・雑誌" AND core = "false") OR (subcorpusName = "出版・書籍" AND core = "true") OR (subcorpusName = "出版・書籍" AND core = "false") OR (subcorpusName = "図書館・書籍" AND core = "false") WITH OPTIONS unit = "1" AND tglWords = "20" AND tglKugiri = "|" AND tglFixVariable = "2"
```

「語彙素」ではなく「語彙素読み」で指定したのは、「気がつく」について語彙素「付く」で指定すると、「気が着く」と表記されたもの 1 例、誤解析からか(「動詞・非自立可能」ではなく「動詞・一般」と解析されている)「気がつく」と表記されたもの 1 例が検索されないためである。

以下では、紙幅の関係上、前後文脈(前方共起条件、後方共起条件)を指定して検索した際の検索条件式は省略する。

- (7) 「気がつく」と「気づくと」は、「つく」の活用形が終止形と解析される場合と連体形と解析される場合があるので、両者を足した用例数を示す。また、「気づけば」は、活用形が假定形と解析される場合と命令形と解析される場合があるので、両者を足した用例数を示す。

なお、「～なら」は、用例がないか、極めて少ないため、除外した。

- (8) 「気がつく」の禁止形の用例 1 例は、実際には禁止形ではないものである。また、「気づけ」という命令形の検索結果には、実際には假定形の用例が 5 例含まれて

いる。

意志形は、中納言の「意志推量形」で検索した。「気づく」の意志形の検索結果には、誤解析により「色気づく」の用例（1例）も含まれる。

このような誤解析は、全てに渡りチェックできないため、上記のものも全て数値に含めることにした。

- (9) ただし、「動詞終止形+終助詞「な」」で検索した用例数であり、この中には、次のような用例も含まれ、実際の用例数はさらに少なくなる。
 - i) これを世間の人に見せなければという使命感がなければ、ぼくは撮れないと思うな。（アサヒカメラ）
- (10) 中納言の語彙素形で示す。括弧内の比率は、長単位検索に基づく副詞総数中の割り合いである。
- (11) 「BCCWJ 主要コーパス語彙表」（国立国語研究所）による。
- (12) 藤田（1988）でも、「はたと」について、「たまたま、ある事柄に思い至るという唐突なニュアンスがある「気づく」でなければ、「はたと」のような副詞とはなじまないのである（p.28）」と述べられている。
- (13) 「気づく」でも、少なからず共起することから、傍証とする。
- (14) 語彙素読み「キガツケル」「キヅク」、活用型「下一段・カ行」で検索した。これは、中納言では、「気がつける」の「つける」が語彙素読み「ツケル」、活用型「下一段・カ行」と解析されているのに対して、「気づける」が語彙素読み「キヅク」、活用型「下一段・カ行」と解析されているためである。また、この中には、誤解析による用例が、「気がつく」で4例、「気づく」で3例含まれる。

参考文献

- 藤田保幸（1988）『「気づく」に関する一考察——「知る」との対比において——』、『語文』51, pp.23-34, 大阪大学
宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』, 秀英出版

辞書類

- 柴田武・山田進（編）（2002）『類語大辞典』, 講談社
北原保雄（編）（2010）『明鏡国語辞典 第2版』, 大修館書店
金田一春彦・池田弥三郎（編）（1988）『学研国語大辞典 第2版』, 学習研究社
日本国語大辞典第2版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2002）『日本国語大辞典 第2版』, 小学館

用例出典

「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」, 国立国語研究所